

牛群検定通信 No138

～ 秋に向けての対策（2） ～

今年の夏は例年の夏と異なり、梅雨が長くその後の猛暑の後に長雨と猛暑が繰り返すという、今まで経験したことのない夏でした。長雨の期間、気温がそれほど上がらなかったため、しのぎ易い夏であったと感じておられる酪農家もおられますが、牛は例年になくダメージを受けている場合が多くみられます。実際、乳成分を見ると例年と異なる傾向が見られます。

例年8月は気温が高く、飲水量が非常に増加するためMUNが高くなり乳蛋白質率が低下しますが、今年は例年MUNがピークとなる8月中旬にMUNはそれほど上がらず、乳蛋白質率も低いままの農家が見られました。MUNが高いということはそれなりに飼料摂取量が確保されているということですが、MUNが低く乳蛋白質率も低いのは、飼料摂取量不足の時にみられる傾向で、今年の夏は8月中旬から飼料摂取量が低下していることを示しています。つまり例年より早い段階から飼料摂取量の不足が始まり、MUNも乳蛋白質率も低くなったものと考えられます。また、このような農家では9月になって、乳量は多少回復しても乳成分は回復しておらず、暑熱の影響が例年より長引いていることが伺われます。

一方、9月中旬以降涼しくなってきたため、飼料摂取量も回復し、乳量も増加し始めている農場も多くみられます。しかしながら、乳量が回復したからと言って安心してはいられません。乳量が増えるということは牛乳中に出ていくカルシウムが増えるということで、牛の体からカルシウムが減っていくということを意味しています。また、夏の暑熱の影響で夏場はカルシウムの吸収率が低下していたため、体内の貯蔵カルシウムが大幅に少なくなっています。これらのことから、搾乳牛では秋になって乳量が増加する時期になるとカルシウム不足を起し、起立不能、第四胃変位、食滞、乳房炎等が多くなってきます。ですから、気温が低下し乳量が回復してきたときには、カルシウムの給与についてよく考えなければなりません。

TMR給与を行っておられる方はTMRのカルシウムを増やせばよいのですが、分離給与を行っておられる方は、給与方法が重要になります。カルシウムの吸収は腸の中のごく短い範囲でしか行われませんので、一度に多量のカルシウムを与えても吸収されず、そのまま糞の中に出てしまいます。ですから、少量ずつ回数を多く与えないとカルシウムの吸収量は増加しません。手間は掛かりますが乳牛の事故防止や生産性向上に欠かせませんので、是非実行してください。

また、秋になってくると分娩時の事故も増加しますので、注意が必要です。これも夏場の暑熱の影響でカルシウム不足となり、難産や、逆子、胎盤停滞、分娩後の起立不能、食滞など、分娩時の事故の可能性が非常に高くなりますので、この時期は移行期のカルシウム管理に十分お気を付けください。